

「日光プロジェクト」2022年度実施報告書

センター員 倪 永 茂

センター研究員 重 田 康 博

はじめに

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターと日光市国際交流協会の共同主催事業「国際交流都市日光の再発見」（通称日光プロジェクト）は今年度を含め8年間実施してきた。

新型コロナウイルス感染症や、いままでの担当責任者の交代等、環境が大きく変わったなか、今年度の実施状況について本稿で報告する。

プロジェクトの目的と計画

日光プロジェクトの特徴を2つの言葉で表現するならば、国際交流と地域貢献に凝縮することができる。国際交流とは、参加する学生のほとんどが外国人留学生で、地元国際交流協会の方々との交流がプロジェクトを通じて可能になる。地域貢献とは、日光市の観光や行政サービスについて、観光客へのアンケートや現地でのフィールドワークによって参加者が日光市に対して提言提案を行うことである。

年度はじめに日光市国際交流協会の要請により、現地のフィールドワークを1回、シンポジウムの代わりに報告会を実施することになった。新型コロナウイルスの脅威に徐々に慣れてきたとはいえ、規模縮小はやむを得ない。

また、いままでの7年間、担当責任者であった重田センター員が定年退職され、倪センター員が今年度の担当者に指名された。

さて、今年度のテーマ設定については、センター長の提案のもと、「日光の文化的価値を活かした観光地づくりに留学生と考える」というものにした。

世界遺産の社寺や奥日光の豊かな自然を有す

る日光市は日本有数の観光都市であるが、課題も抱えている。たとえば、多くの観光客が日帰りで日光を訪れており、宿泊率の低さも一つの課題である。そこで、アフターコロナを見据えて、数日にわたる体験型観光や滞在型観光モデルをデザインし、日光の観光資源に日光の文化的価値をさらにプラスしたものを国内外にアピールしたいとするニーズが、日光市側にある。この点、大学における多文化環境と学術性が合わさり、多様なバックグラウンドを持つ学生や研究者が日光市の文化的・歴史的あるいは自然に関する魅力を深掘りすることで、新規性やストーリー性のある観光の楽しみ方を発見することができる可能性がある。

日光観光の「文化的価値」は極めて多様で豊かである。例えば、明治初期時代の観光地、避暑地として開発され、「日光金谷ホテル」等で代表される西洋建築物、中禅寺湖畔に建てられたイタリア大使館やイギリス大使館などの施設、「日光田母沢御用邸記念公園」等で代表される皇室文化、日光真光教会や、青龍神社、日光二荒山神社、山輪王寺、神橋等の宗教文化、そして、世界遺産そのものが高い文化的価値をもつものである。

このように、今年度のプロジェクトは目的として、日光の文化的価値を留学生の目線から掘り起こし、インターネットを通じて発信する。また、成果を日光市と共有し、日光に対して国際貢献・地域貢献をしていく。深掘りすることで、日光観光資源を外国人留学生の母国との相似性、相違性を調べ、日光のさらなる魅力を国内外にアピールすることが、本プロジェクトの狙いである。

なお、国際学部の「ミッション達成支援経費」により、プロジェクトの活動経費として15

万円いただいている。

プロジェクトの活動内容

前学期では日光観光課、日光国際交流協会との打ち合わせを行い、テーマの設定、フィールドワークコースの選定等の準備作業を行った。

実際の活動は例年どおり、後学期の10月1日より始まった。時間に沿って、以下にその詳細を記す。

(1)参加者の募集(10月1日～10月10日)

チラシを作成し、主に外国人留学生に対して参加者を募った。スクールバスの定員制限である25名により、学生数の上限を18名とした。

また、いままでのフィールドワークの経験から、5～6名のグループならフットワークがよかったので、今回は3つのグループに分けた。

(2)説明会の開催(10月18日12時～12時40分)

参加者に対し、プロジェクトの目的、文化的価値としての、世界遺産(日光の社寺)、皇室文化、西洋建築文化、宗教文化を写真を使って簡単に説明し、プロジェクトの活動内容、フィールドワークの日程やコース、参加に関する確認事項、緊急連絡先等を説明案内した。

(3)学習会の開催(10月25日13時～14時30分)

学習会は従来なかったものであるが、フィールドワークの前に、日光の文化的価値について外国人留学生に勉強してもらうことがとても重要だと考え、今年度に新規設定した。

学習会では、センター長や日光観光課の方による挨拶につづき、主旨説明、日光市観光の概要・日光市の文化財、宗教文化、西洋建築文化等について、日光市観光経済部観光課観光交流推進係の方、日光市教育委員会事務局文化財課課長、米山、倪センター員、重田センター研究員がそれぞれ説明した。

また、各グループのリーダー、アンケート調査担当者を選出してもらった。

(4)フィールドワークの実施(11月5日)

日光国際交流協会との協議のもと、フィール

ドワークは日光市西町を中心に実施した。

具体的には、3つのグループはそれぞれ、以下のコースを回りながら、文化的価値の確認や発掘、アンケート調査を行った。

グループA：田母沢御用邸記念公園、日光東照宮、神橋。

グループB：金谷ホテル歴史館、日光山輪王寺、大猷院。

グループC：田母沢御用邸記念公園、日光真光教会、青龍神社、日光二荒山神社。

参加者はセンター員や国際学部教員等7名、学生18名、日光国際交流協会会員9名、計34名であった。協会会員にはコースや、ランチのとれる飲食店の案内等、欠かせないサポートをいただいた。

スクールバスによる送迎であったが、乗車するまえに、コロナ感染の有無を確認するために体温を一人ずつ測定し記録した。

当日は天気恵まれ、紅葉の真ただ中の日光の美しさに参加者一同が感動した。コースの各スポットが西町に集中したため、歩行による移動が可能であった。

(5)報告会の開催(12月10日10時～12時)

従来のシンポジウムの代わりに、今回は学習会という形で成果報告することになった。

国際学部長と日光市観光経済部観光課長による挨拶につづき、主旨説明、趙敏講師による基調講演(日光の文化的価値を深掘する)、留学生によるグループ発表、発表に対するコメント等が報告会の内容である。

基調講演では世界遺産としての日光と日本国内や中国の歴史とのつながりを中心に、文化的交流史を豊富な写真を使って物語った。

留学生の発表内容は多岐にわたるが、地域貢献として、日光市への提言提案、文化的価値についての考察をおこなった。なお、各グループの作成したスライドをスペースの都合でそれぞれ1～2ページにまとめたものを次ページ以降に示す。

<グループ A の発表内容>


日光を綺麗にしよう！日光の魅力と提案



- ・Aグループ
- ・ジャーン シェン ホン
- ・ハ・ファム・ハイ・クイン
- ・リソウ
- ・マルコモンカダ
- ・クルッシュニン・ディーモトリ

・Aグループのエリア紹介(1)

・日光母沢御用邸記念公園




御用邸は創られた当時から梅の園と呼ばれてきた。南無殿式に軟装風の畳を取り入れることで、当主の好意を感じさせる高級空間を作り出している。実業家下の高客として使用された。

赤坂倶楽部の初期に御玉安所があり、明治の御めから当館では、新館館との交通のために、ゼリヤードを埋んでおられた。

インタビュー調査 INTERVIEW

- ・調査対象:東照宮の旅行者
- ・方法:東照宮エリアに訪問した観光客に対して街頭インタビューを実施
- ・回答者:37人

旅行者の男女の割合

性別	人数	割合
男性	20	54.1%
女性	17	45.9%

旅行者の年代別データ

年代	人数	割合
20代	4	10.8%
30代	10	27.0%
40代	15	40.5%
50代	16	43.3%
60代	2	5.4%

- ・コロナ前とコロナ後(コロナ禍)で旅行先選びに変化はありましたか?
- ・無いと回答した旅行者(10人)と回答した旅行者(7人)
- ・人が多くないところを選んだ

インタビュー調査 INTERVIEW

交通手段

ほとんどの旅行者はバスと電車を使用している。

交通手段	人数	割合
バス	17	45.9%
電車	22	59.5%
自家用車	10	27.0%

観光客が日光で感じた問題

- ・交通渋滞
- ・クレジットカードが使えないお店が少ない
- ・騒音


交通渋滞と答える人が5割、特に連休や紅葉の時期

課題

- 電子決済が使えないお店が少ない
- 交通渋滞
- 案内の言語が少ない

考えられる対策


日本人は自家用車で観光することが多いので、休日は渋滞しやすい。一般市民は観光バスを利用し、自家用車の運転を減らすことを勧める。



観光バスに乗れば、ハードドライブだけでなく、日光の景色や文化も楽しめる!

まとめ

- ・文化と自然風景例えば、東照宮、中禅寺湖
- ・文化に関連する活動の促進
- ・交通渋滞、電子決済が使えないお店が少ない
- ・コロナの影響により、観光客の減少につながっている




発表の流れ

- ・Aグループのエリア紹介
- ・インタビュー調査
- ・課題
- ・考えられる対策
- ・まとめ

・Aグループのエリア紹介(2)

・日光東照宮




牡丹の花に囲まれ日の光を浴び、うたたねましているところから「日光」に由来できたらよかった。

「見どころ、言わぬ・聞かざる」の三篇の彫刻が有名だ。

インタビュー調査 INTERVIEW

何度目の訪問でしょうか?

回数	人数	割合
それ以上	2	5.4%
一回	7	18.9%
初めて	28	75.7%

滞在期間はどのくらいでしょうか?

滞在期間	人数	割合
それ以上	4	11.1%
一日	6	16.3%
日帰り	26	72.2%

旅行者のコメント: 東照への直通バスがあるので、ほとんどの人は日帰り旅行だ。

インタビュー調査 INTERVIEW

今回の旅行でどこを訪れていますか?

- ・1位 東照宮(37人)
- ・2位 神橋(20人)
- ・3位 中禅寺湖(17人)
- ・4位 華厳の滝(12人)
- ・5位 新藤原(1人)

旅行の目的

目的	人数	割合
観光	16	43.2%
2倍のリラックスしたい	12	32.4%
3倍、文化旅	9	24.3%
1日7人	1	2.7%

旅行を継続してどう評価しますか? 今回の旅行について総合的にどう思いますか?

評価	人数	割合
素晴らしい	15	40.5%
悪い	22	59.5%

考えられる対策

キャッシュレス決済 4割のメリット

- 01 店舗の決済手段
- 02 観光客の利便性
- 03 観光客の決済手段
- 04 キャッシュレス決済の普及

電子マネー一便化です。


電子決済を利用すれば、レジ業務の効率化だけでなく、新型コロナウイルス感染のリスクを減らすことができる。

考えられる対策

案内板に使われている言語を増加する。

QR Codeは便利で簡単に使えるので、さまざまな国の人が日光の歴史や文化を知ることができる。

QR Codeでシンプルかつ簡単に使える



ご清聴ありがとうございました



<グループBの発表内容>

日光プロジェクト発表

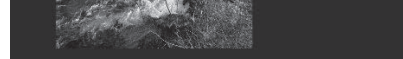
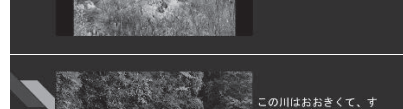
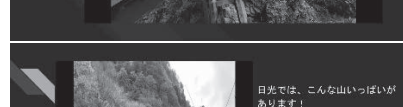
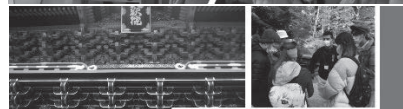
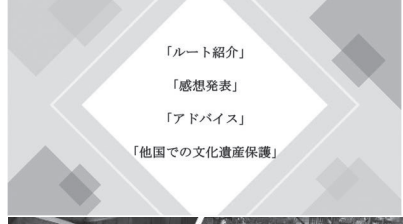
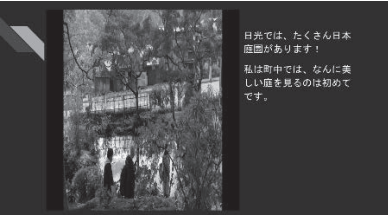
・グループB
 ・メンバー
 MA HAONAN
 ZHENG CHUYAO
 Bishop Coomer
 AigyaTovshirayga
 Polgahagedara Don Pubadu Sanjeewa

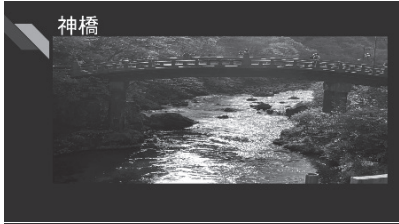


「ルート紹介」



・感想発表





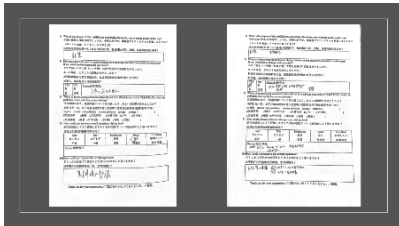
神橋



日本人が自然界と溶け込もうとします！この所は日光が良い例えると思います！日光の森と川と庭から、徳川家康の神社まで日光の住んでいるの人が毎日自然界に住んでいます。私も日光の人のように、自然界と溶け込もうとしたいです。



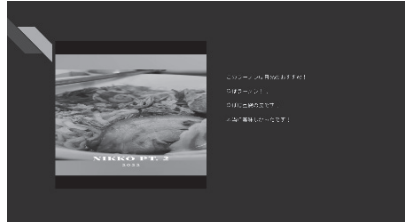
・アドバイス



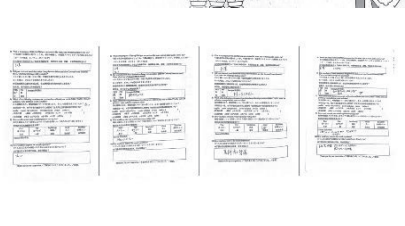
他国での文化遺産保護



ご清聴ありがとうございました



・紅葉をより...



人を見、物を見、生活を見る

＜グループCの発表内容＞

日光プロジェクト 2022

Group C
グループリーダー
チメズル、マユブ

ヤクブ、ベトラ、ワナンチム、ヨウ、キウセン、ムウラー、ムサシ、ウメドレシ

Cグループの導入

対象場所:

1. 田沼次郎南無殿記念公園 (Tamaozawa Imperial Villa Memorial Park)
2. 善徳神社 (Sengū Shrine)
3. 日光真光教会 (Nikko Shinko Church)
4. 日光二荒山神社 (Nikko Futarasan Shrine)

研究の目的:

- アンケートを通じて観光客の意見をまとめ、問題について解決方法の提案を出す
- 日光文化を言い、世界に広がる

アンケート調査の結果

性別

男性 女性

年齢

10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代

調査結果の概要:

- 回収数: 11件
- 回答者の情報: 男女、20代~70代
- 日本人、外国人

問題 #2

夜の食事がある場所の数は少ない

Googleマップで日光のレストランを探し、二十軒の中で十二軒は18:00までに閉店する

12名の回答者の中で10名の滞在期間は一日以上である

解決方法の提案

1. 交通渋滞に対して
 - 中心日光においては、自家用車でのアクセスを禁止させるか、使用は、せめて大南園を実現させること（主に神橋の交差点の状況）
 - そこで、公共交通機関のサービスのだけで交通を行う
 - 日光の駅の近くのエリアや西町の外れに駐車場を建て、そこでまでに自家用車の使用を許すことができさせる

その他

日光のSNSの宣伝

まとめ

1. 交通渋滞の問題を解決する必要がある
2. 夜にも食事を取られるように、お店に営業を長くすると取得させる
3. お年寄りの人々のためのアクセスを改善させる
4. 日光のSNSを更に宣伝する

発表の流れ

- 背景
- 目的
- 内容/問題
- 提案
- まとめ

研究方法

1. 観光客に対するアンケート調査
2. 調査の結果をまとめ、分析する
3. 問題の解決方法を提案する

1. 主な問題: 交通渋滞

交通手段

■ 自家用車 ■ 公共交通機関 ■ 両方

2 3 6

- 一番よく選ばれた
- 11人の中から7人が交通渋滞の影響を受けた
- 6人は公共交通機関
- 3人は自家用車
- 私達の体感から同じ印象を受けた

問題 #3

お年寄り人々にとってアクセスしにくい場所 (階段、坂、...)

解決方法の提案

2. 夜の食事ができるお店
 - レストランに営業をさらに長くする
 - 可能を考慮するように取得させる
3. お年寄りの人達向けのアクセスを改善させる
 - 手すり
 - ベンチ
 - 一般に、座れ、休憩できる場所を増やす

その他

1. Youtubeで英語のサブタイトルを付ける
2. SNS (Instagramなど) で英語を使う
3. 国内と海外の有名ブログやインフルエンサーと協力する
4. Nikko app 改善すべきかもしれない (例えば、英語の説明、高橋選べること、event開催情報画面に出るようになど)

ご清聴ありがとうございました

発表の準備として、各グループはフィールドワークのあと、リーダーのもと、複数回の打ち合わせやリハーサルを行い、周到な活動をしていた。

日光観光課や日光国際交流協会の方々は直接、あるいは、オンラインで参加していただいた。

プロジェクトの成果と今後の課題

今年度の日光プロジェクトの成果を以下4つの点にまとめる。

(1) 地域貢献

日光の観光資源を文化的価値という観点から分類したのが今年度の試みのひとつである。来るべくアフターコロナ時代ではより多くの外国人観光客に日光の魅力を感じてもらい、滞在型・体験型観光に結び付くことにさまざまなアイデアや工夫が必要で、日光観光に外国人留学生の視点からみた文化的価値を確認し、掘り出すことによって、対象国の文化との相似性、相違性をアピールすることで、地域観光・地域経済の振興に貢献する効果が期待される。

また、報告会を通して、外国人留学生の目線でみた外国人観光客の呼び込みに有効な日光市観光政策にも影響を与えることができる。

(2) 教育効果

フィールドワークや学習会、報告会の開催において、センター員、外国人留学生、日光市職員、日光国際交流協会員の協働作業が必要で、外国人留学生に日光の観光を体験するだけでなく、日本の文化、地域社会や地域観光についてその現状を一層理解してもらい、さらに市民との草の根レベルの交流によって、大学の授業では得られない教育効果が発揮できた。

また、日光の文化的価値を再確認することによって、日光観光や世界遺産の魅力がより具体的になり、地域社会のグローバル化、グローバル化の事例として、地域観光、地域経済活性化の事例として、関係授業の教材に加わることにより、国際学部全般の教育的効果の向上にも貢献することにつながる。

(3) 学問的価値

世界遺産となっている日光の社寺を支えてきた西町に住むひとびとの生活や文化的活動の変遷等、多くの貴重な情報を地元出身の学習会講師によって初めて知ることが多かった。また、学芸員でもある国際交流協会員の案内を通じて、価値の高い文化財が西町に点在していることがわかった。いずれも、学問的価値が高く、地元大学の研究対象として今後その展開が十分期待できる。

(4) 地域連携

地域との連携強化は国際学部やセンターにとって重要なミッションであり、中期計画にもつねに盛り込んでいる。日光プロジェクトを継続的に、有効的に展開することによって、学部の地域連携活動の見える化に貢献することになる。

また、今後の課題として2点をあげる。まずは学習会の質をさらに高めることを感じた点である。日光の気候条件ではフィールドワークの実施時期はどうしても11月上旬までになっしまい、参加者の募集からの1か月間に学習会を複数回開催することが今回できなかった。とくに文化的価値についての学習は外国人留学生にとって言葉の壁や文化的違いによってもっと多くの時間が必要だと思われる。プロジェクトの計画達成や成果にもかかわることなので、今後の改善を要する。2点目としては、文化的価値に関する質問項目をアンケートに加えるべきだとの指摘があったことである。

おわりに

日光プロジェクトについて、今年度の実施目的や計画、活動内容、成果と課題について本文で説明してきた。地域貢献としての日光プロジェクトはいままで各方面に好評され、9月29日に開催された第3回宇都宮大学コラボレーション・フェアにも出品展示した実績をもっている。来年度以降のますますの発展に期待する。